



山本一郎神父様 司祭叙階25周年 銀祝 祝賀会 令和4年5月8日

「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>



発行

カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959-00072
印刷・(株)才津印刷所

「コルカタの 聖テレサの祈り」

主任司祭 工藤 秀晃

皆さん、「コルカタの聖テレサ」という聖女をご存知でしょうか？列聖からまもなく六年になります。まだまだこの呼び名は浸透していないかもしれせん。でも、「マザー・テレサ」といえば、ピンとくる方が多いのではないかと思います。このマザー・テレサに関するエピソードに、次のものがあります。

【ある日、一人のシスターが、マザー・テレサのところに来て心配そうな顔で言いました。「マザー、金曜日と土曜日のお米がありません。このことをみんなに伝えた方がよろしいでしょうか？」と。このままでは、二万人の人が、空腹のまま二日間も何も口にすることができません。このようなとき、マザー・テレサの態度は決まっ

ていました。それは、神様を信頼して「祈る」ということです。

その祈りの内容は、「二日分のお米がなければ、大勢の人々がお腹を空かせてしまいます。今、飢えて動けない人もいます。私は食べられなくてもかまいません。どうか貧しい人々に必要な食べ物をお与えください」というものでした。このように一生懸命祈り、他の人にも祈りを頼まれたのでしよう。神様はそのような祈りを聞き入れてくださいます。金曜日の朝九時、不思議なことが起ります。予告もなしに、何千個ものパンを積んだトラックが到着したのです。その日、どういいうわけか政府の意向で学校が休校になり、学校に配られるはずのパンがすべてマザーたちのもとへ運ばれてきたのです。二日分の食料不足は、これで解決しました。】

ある人は、これを偶然だと思ってしまう。でも、マザー・テレサに偶然はありません。むしろ

ろ、神様が助けてくださったと確信していました。実際に、このような助けがよく起こったようです。では、なぜ神様はマザー・テレサの祈りをいつも聞き入れて下さるのでしょうか？実は、お願いする前に必ずマザーは、感謝の言葉を忘れなかったからではないかと言われます。

私たちの間には、誰かから何かしてもらっても、気づきもしない人や、気づいていても、それが当たり前だと思って、感謝しない人が少なからずいます。そういう感謝知らず・恩知らずの人が、困ったときだけやってきて助けを求めても、感情的には耳を貸したくないものです。でも、普段からささいなことに感謝してくれる人が助けを求めてきたら、何とかしてあげたくなるのが人情というものではないでしょうか。ある意味、神様も同じではないかと思うのです。普段からいつも感謝している人が困って助けを求めたら、

いつも以上に助けてあげたくなるのではないのでしょうか？

マザー・テレサは、折に触れて「お願いします。助けてください。」と祈っていました。でもその前に、いやそれ以上に、「ありがとうございます。いつも感謝しています」と祈っていたのです。

ある人がこのような言葉を残しています。「誰かに何かやってもらう時、ありがとうと言うのは初級。嫌なこと・苦しい時・病気さえもありがとうと言えるのが中級。何も無いふだんの生活にもありがとうと言い続けられるのは上級」だと。果して今、私は何級を生きているのでしょうか？



工藤神父様 霊名・誕生日の お祝い

七月三日、二番ミサ内にて工藤神父様の霊名・誕生日のお祝いをいたしました。鍋内秀明副議長のスムーズな進行にて、赤尾一美議長のお祝いの言葉から始まりました。小学生からの皆さんの祈りが込められた霊的花束、青年会からの花束、女性会からの誕生日プレゼントをお渡ししました。



工藤神父様、聖ペトロの霊名のお祝いおめでとうございます。神父様は浦頭教会に赴任なされ早四回目となる霊名のお祝いを迎えられ、浦頭教会が聖ペトロ・聖パウロに捧げられた守護の聖人のお祝いを、共に祝うことは私たちにとっても二重の喜びであり、大きな喜びを感じています。

ペトロは『主からわたしを愛しているか？』と三度問われ、主よわたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です。と三度答えた』。すると主は『わたしの羊を飼い：：わたしに従いなさい』と言われた。弟子の頭として、いかにペトロに大きな信頼と期待を寄せていた事でしょう。

神父様は自慢の笑顔でいつも子どもたちに心優しく寄り添いながら、時には同じ目線で接するなど、まさに良き羊飼いの証だと思えます。

“神父様”十月には半泊教会が百周年を迎えます。神父様の



信徒代表 赤尾 一美

ご指導のもとに、幾多の困難を乗り越えながら先祖からの尊い信仰を、今日まで守り伝えて来られた、その信仰の光が実り深き百周年となるよう、神父様のお力添えをよろしくお願い致します。

神父様は一週間後の十日に誕生日を迎えられ、五十代の仲間入りだとお聞きし、更に司牧の道に深みが増される事に、信徒一同祝福の拍手を送りたいと思います。

最後に、神父様には何かと忙しい聖務の中、ご負担とご心配をおかけ致しますが、身体だけには充分ご自愛頂き、迷える私たちをご指導下さいます様にお願ひ致します、霊名のお祝いと、誕生のお祝いと致します。



◎神父様のお言葉

工藤神父様より、去年はまだ四十代という意識で活動してきましたが、これからは五十歳という年齢相応の行いをしていきたいと言われました。

銀祝を迎えて

ドミニコ・山本 一郎

一九九七年二月三日、フランシスコ・ザビエル・島本 要大司教様から叙階の恵みを頂いて早二十五年。同僚二人と共に祭壇前に伏して願ったあの時の事は、今でも思い出せる原点です。あの日の自分が、今の自分に問い掛ける「どうだった？」あの日の初々しさは当の昔に失い、体重も増え、髪も薄くなり、外見も変わり果てた自分。それでもどうにか神父をしている事位しか、報告出来る事は見つからず、何か得たとすれば、年齢と脂肪と経験位のもです。我ながら「本当に早かった」という気持ちと、「未だ銀祝」という複雑な心境です。

昨今のコロナ禍で、帰郷も出来ず。故郷の恩人方には、御無沙汰しております。どうにか元

気にやっています。銀祝を迎えられる感謝の気持ちを紙面に認めます。お祈りに支えられ銀祝を迎えられました。報告できる事はそれぐらいです。時々届く「島のひかり」に元気を貰い、近くに居ながら地元を思い出してあります。随分変わった風景や雰囲気を読み取り、「自分も頑張ろう」と鼓舞しています。元気にやっています。それだけで充分かもしれません。与えられた処で与えられた使命を忠実に生きて、亡くなった恩人も含めて恩返し出来れば何よりです。私に出来る恩返しは、それ位しかなさそうです。引き続きお祈り下さい。私も故郷の皆さんを思い出しながら神父を全う出来るように努めます。

二〇二二・六・三〇

木鉢教会にて



ふるさとの信仰

中村長八師に学ぶ

ブラジル移民の始まりは一九〇八年とされています。九州からも多くの人びとが移住したそうですが、その中にはカトリック信者がたくさんいたようです。熱心な信徒にとって移住先で日曜日のミサに参加できないのは寂しいことでした。もちろん現地のポルトガル語のミサは盛んに行なわれていたはずですが、ミサの内容は同じでも一言も理解できないとなれば、やはりミサに参加した気分にはなれません。ほとんどの人がポルトガル語を話せない中で、生活が少し落ち着くと、日本語によるミサや子どもたちのための要理の勉強を日本語でできないかと考え始めるのが当然です。

ブラジルの教会関係者は日本人信徒の思いを察知して下さり、日本人司祭の派遣を要請してくださいました。最終的に長

崎教区に声がかかりました。が、応じる司祭が見つからず苦慮していました。

そのような中、五十八歳という年令で、海外宣教しかも邦人宣教師第一号となる中村長八師が勇気をもって応えてくださったのです。新しい言語を覚えるには難しい年令ですが、中村師はラテン語が得意だったようので、会話に役立ったそうです。

私が小学六年生のころ、中村師の遺品が少し送ってきました。祭服があったのを覚えていますが、そのことがきっかけで私たちの「けいこ」仲間のあいだで、ちょっとしたブラジル宣教ブームが起きました。私も大きくなったら宣教に行きたいなと少しだけ夢見たことがあります。

中村長八師は教区報に宣教報告の便りを送っています。そのコピーを係から頂いていたので、少しずつ紹介したいと思います。

Sr 木口

洗礼の恵み

六月十八日、鍋内利輝・怜美さん夫妻の長男である環久都君の洗礼式が小教区にて行われました。親戚に囲まれて和やかな雰囲気の中、最後の方ではお疲れのようでスヤスヤと。

浦頭では段々と洗礼の秘跡が執り行われる事が少なくなってきました。この秘跡を通じて教会共同体がさらに共に歩んでいきますように。



それぞれのことを祝って

今年も、こどもの日・母の日・父の日がやって来りました。

毎年のように、それぞれのために御ミサが捧げられました。

こどもの日は五月一日のミサと、こども達へのプレゼント。母の日は五月八日にミサとカーネーションのプレゼント。父の日は六月十九日にミサとプレゼントがあり、それぞれに喜びをかくし切れない様子だった。

でも何よりも大切なのは、物的なものより、健康でいられることの喜びを神に感謝することだと思おう。

一日一日を元気ですごして行きますように。

それぞれに準備をして下さった役員の方々に、ありがとうございました。

奥浦慈恵院の歴史

慈恵院の歴史は、その時代の必要から生じた活動、行動の歴史です。

奥浦慈恵院 入口 里子

慈恵院の歴史はキリスト教迫害の時代から始まります。「五島崩れ」と言われ、五島でもキリシタン達が信仰を表明したため、弾圧が始まりました。一八六八年（明治元年）久賀島では、



慈恵院の初めの頃

わずか十二畳の牢屋に約二〇〇人が八ヶ月に亘って収容された。立ったまま押し込められて雨戸を閉切られ、多くは人の体にせり上げられて足が地に着かない状態だった。まず老人、そして子ども達から次々に死んで行った。人間としての尊厳は皆無の悲惨な状況の中で、大人も子どもも、何より大切な信仰を捨てるとは言わなかった。壮絶な拷問、飢えなどから三十九名が殉教し、出牢直後も三名が命を落とすと言う迫害があり、その時のキリシタン信者の信仰が大いに創立に携わっています。

長崎では、浦上のキリシタン三千数百名が流罪にされ各地で迫害が行われているということがあります。これは、人道問題として外国公使団の抗議を受け、明治政府の外交上の大問題となりました。そして、遂に明治六年二月二十一日、キリシタン禁制の高札は取りのけられるようになったのです。各地に流されていた浦上のキリシタンたちは次々



子供達と共に歩んで

その時代、パリ外国宣教会の神父たちが宣教で出会ったのは、身体的にも精神的にも大きな傷を負い、貧しく生きる信仰深い信者たちだったのです。神父たちにとっての第一の課題は彼らに自信と勇気、希望を与えることでした。マルマン神父とペルー神父は彼らを励まし、早く迫害の苦痛を忘れるよう祈り働きました。本来、パリ外国宣教会の目的は宣教であり、施設は創設しないのが原則でしたが、宣教師たちが当時の人々に必要だと考えたものは、養育院であり伝道学校でした。信者たちは、カトリック信者としてのアイデンティティを必要としていたのです。

に故郷に帰って来ました。それと前後して平戸、五島、外海などの迫害も終わりました。この信仰の自由の喜びから、浦上、奥浦、鯛の浦など各地で、キリシタン達によって孤児、貧児、病人、老人などの救済活動が行われることとなったのです。明治七年浦上養育院、明治十三年希望の灯学園、奥浦慈恵院が創立されています。この最初に創設された浦上養育院に携わったド・ロ神父の後輩達が、五島列島の中通島（上五島）や福江島（下五島）に明治初期に児童養護施設を作り、一四〇年以上経った現在も三ヶ所とも続いています。



ロザリオの祈り

〜聖母月〜

まだまだコロナ感染者数が減らない状況で多くの行事が中止となる中の五月、感染症対策を行い教会内でロザリオの祈りをしました。

日ごとに先唱は男の子であったり女の子であったり：昨今の世界で起こる様々な情勢に、多く繰り返し唱えられたアヴェ・マリアの祈りにより聖母マリアの取り次ぎがありますように。



新たな侍者デビュー



小教区では現在、小学二年生になると侍者としてミサの奉仕を始めていきます。今回、新たに一名の女の子が加わりました。

二年 入口 里彩

くどうしんぷさまからじしゃのれんしゅうをしていただき、六月十二日、日曜日のミサではじめてじしゃをしました。まだろう読後の『かみにかんしゃ』しかできませんが、これからのいろいろおぼえてしんぷさまのお手つだいをがんばりたいです。

奥浦修道院

転入 よろしく！

Sr古木 久美子

転任から早いもので三ヶ月が過ぎてしまいました。奥浦での生活は初めてですが、以前久賀や三井楽にいた事もあり、慣れるのも早かったように思います。現在、平和のぼら保育園でお世話になっていきます。

司祭、修道者といった聖職者を数多く生み出している浦頭小教区で奉仕させていただく事に感謝しながら、小鳥のさえずりと大自然の中でいやされつつ、子どもたちの信仰生活のお手伝いのできたらと思います。

転出 感謝のうちに…

Sr中尾 菊代

(五島市松山町)

聖家族修道院)

奥浦修道院に居りました時は何かと気遣っていただきありが

とうございました。信徒の皆様
に大事にされていることを感じる日々でした。私も皆様と一緒に主の望みが実現しますよう祈ります。!!感謝のうちに!!

Sr川口 幸子

(お告げのマリア修道会)

本部修道院)

奥浦修道院に在任中は大変お世話になり、ありがとうございます。巡回教会へのごミサ、初聖体の準備と僅かの期間でした。十分な奉仕もできないまま転任してしまい心苦しく『神のなさることは時にかなって美しい』という聖書の言葉に信頼して前に進みたいと思います。工藤主任神父様を初め、祈ってください。先輩信徒の皆様、三年間大変お世話になりました。心残りが無いとは言えませんが、『与えられた場所で自分らしくみ旨のままに』を心に刻みながら私にできる奉仕を姉妹と共にがんばって参りたいと思います。

合同奉仕作業

(浦頭・堂崎・宮原・半泊)

七月三日、壮年・女性・シメオンアンナ会合同奉仕作業を無事に終える事ができました。

当日は、早く開けた梅雨後の日差しによって熱中症の心配がありませんでしたが、厚く覆った曇り空のもと、皆さんスムーズに作業を行っていました。

教会見学に来られていた多くの観光客の方々も、この景観はみんな協力しあってもたらされていると感じたのではないのでしょうか。

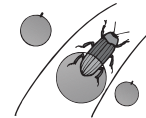


ブロック壁撤去後の情景

ふる里だより

三年ぶり

“蛍見つけ”



コロナ禍の為、二年間続けて中止になっていた蛍鑑賞会が五月二十八日、前田川のカップ公園でひさしぶりに行なわれた。

七時三十分から始まった会には、奥小・奥中の子供達、保護者、先生方、スタッフ合わせ百名程集合。始まる前には、入念なコロナ感染対策。マスクを忘れた人にはマスク配布、漏れなく検温等を実施。

当日は、澄瀬ビクターセンターの出口さんによる野鳥ハチクマの講義と、まち協スタッフの木口さんによる蛍の一生等の説明が行なわれた。

この会に先立ち、奥小・まち協によるEMダンゴ作り、投入が年間行事として行なわれていた。平年に比べ少し光の舞いは少なかったが、子供達を中心にあちこちで楽しそうな歓声が沸き起こっていた。

子供達ジオパークへ 曇り後雨のち……。



今年一月、五島列島が日本ジオパークに認定され、奥小の子供達にとって認定後初めてのジオパーク見学が六月二十五日に行なわれた。天気予報によれば午後から曇り。ただ、梅雨時期の天気は気まぐれ。戸岐大橋から見下ろす海岸線のスタッフ説明中に時雨れ出し、風も舞い始め途中断念。メインの宮原展望地からの久賀・田ノ浦断崖のジオサイト見学は、次回以後のお楽しみとなった。子供達はその後、急遽行なわれた体育館でのドッジボール等で歓声をあげた。

“跳ぶぞ、青春

駆けるよ奥浦っ子”

五月二十二日、六月六日。それぞれ、五島市中総体バレーボール競技・陸上競技大会が行なわれた。バレーボール大会では、生徒のみんなは全力で最後まで粘り強く試合に挑み、男女共準優勝という見事な結果を勝ち取った。又、陸上大会においては二週間という短い練習期間であったが、生徒は全力で取り組み奥浦魂を見せてくれた。

陸上大会・主な結果

共通 走高跳 第一位 中村 龍人
第三位 鍋内 孝志



五島つばき蒸溜所 OPENを目指して

門田 クニヒコ

半泊教会の隣でジンというお酒を造ります。ジンは無色透明なお酒で、ボタニカルと呼ばれる植物や木、皮、根等と一緒に蒸溜してつくり出します。世界には様々なジンが存在し、最近ではクラフトジンがブームです。

当蒸溜所では、五島の象徴である「椿」を使用。タネを炒って蒸溜し、深みのあるアロマとボディが生まれます。椿以外にも18種類の素材を使用し、最適な条件で蒸溜し、その原酒をブレンドしていきます。個性がありながらも調和のとれた美味しさを目指し、世界中のジンファンを驚かせたいと思っています。ゆるやかな優しい時間が流れる半泊の小さな蒸溜所で、丁寧に一本一本造っていきたいと思います。



GOTOGIN

大型客船来島

六月十七日、コロナ禍を越えて、ひさかたぶりに客船「ぼしふいっくびいなす・二万六千五百トン」が入港。降り立った乗客の人は、船と並行に立ち並ぶテントの前で立ち止まり、五島市自慢の物産に目を留める。船は、門司から福江へそして屋久島に向かう。乗客は二百三十名程で、それぞれオプショナルツアーで世界遺産の教会群や五島市の代表的景勝地を巡る。七月にも再度福江港に寄港予定。



秘跡

◎永遠の安息を

五月十八日 宮原
テレジア 入口キヌ子 90歳

六月三日 大泊
ラウレンシオ 梅木毅彦 55歳

◎ありがとう

たくさんの御芳志ありがとうございます。ございました。

大阪府摂津市 古閑

レイ子様

佐世保市 今村

スマ子様

東京都 Sr木口

直恵様

◎幼児洗礼

六月十八日

ミカエル 鍋内環久都

両親 利輝・怜美



編集後記

外で仕事をやる機会が多い私にとって、六月初めからのジメジメ長雨、ギラギラ太陽の九月末までは一年の中で本当に辛い期間です。

今年は統計開始以来、最も早い梅雨明け、最も短い梅雨となり、ひとまず安心・喜んでいましたが、これから長い猛暑が続くと予想されています。

ところで皆さんは空調服というものをご存じでしょうか？数年前からメディアでも取り上げられている、バッテリーで可動する小型ファンが内蔵された作業着です。気化熱を利用して体温を下げる仕組みとなっています。ただし、膨らんで太って見えるかもしれません。

宣伝するつもりはありませんが、エコで熱中症対策にも効果が期待できる空調服。屋外での作業・行事がある時に使用してみても。手放せなくなるかも？